



竹内好訳

# 魯迅文集

第四卷

筑摩書房

魯迅文集第四卷

一九七七年一月二五月初版第一刷発行

訳者 竹内 好

発行者 井上達三

発行所 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二―八郵便番号一〇―一九一  
電話〇三―二九一―七六五一振替口座東京六一四一二三

印刷・精興社 製本・牧製本

1397-78004-4604

魯迅文集第四卷  
目次

評論 一九二六年六月—一九三〇年四月

すぐさま日記

すぐさま支日記

「給料をもらう」話

講演筆記

上海通信

厦門通信

『墓』の後に記す

「阿Q正伝」の成り立ち

『三蔵取経記』等について

『唐三蔵取経詩話』の版本について

海上通信

声なき中国

95    89    86    80    70    61    57    53    46    38    18    3

革命時代の文学

『少年ヨハネス』引言

魏晋の気風および文章と葉および酒の関係

「大義」はまっぴら

「天乳」が心配

有恒氏に答えて

『語絲』差留め雑感

どう書くか——夜記の一——

小雑感

もう一度香港のこと

文学と汗

鐘楼にて——夜記の二——

いわゆる「宮室文書」について

|                |     |
|----------------|-----|
| 「酔眼」中の朦朧       | 224 |
| 『思想・山水・人物』題記   | 232 |
| 額              | 236 |
| 通信             | 238 |
| まじない歌          | 250 |
| 掃共大観           | 253 |
| わが態度、度量、年齢     | 256 |
| 『現代新興文学の諸問題』小引 | 263 |
| 『壁下訳叢』小引       | 265 |
| 今日の新文学概観       | 268 |
| 『小さいペーター』訳本序   | 275 |
| ならず者の変遷        | 279 |
| 私と『語絲』の関係      | 282 |

「現代映画とブルジョア階級」 訳者付記

「硬訳」と「文学の階級性」

非革命的な急進革命論者

左翼作家連盟についての意見

「宿なしの」「資本家の無気力な番犬」

第四卷訳註についてのおことわり

訳註

評論

一九二六年六月—一九三〇年四月



## すぐさま日記

### 予序

まだ日記を一字も書かぬ先に序文を書く。これを予め<sup>あらかじめ</sup>の序という。

私は前から毎日日記をつけているが、これは自分用のものである。おそらく世間には毎日日記をつける人はかなり多いだろう。もし書いた人が有名になると、死んでから出版されるかもしれない。読んでもきっとおもしろいだろう。なにしろ書くとき「内感篇<sup>1</sup>」とか外冒篇<sup>1</sup>とか、お体裁ぶって書いてないだけに、かえって書き手の真面目があらわれるから。これが日記の正統派だろうと思う。

ところが私の日記は、そうではない。書いてあることといえば、手紙の往復と金銭の出納だけ、これでは面目の面の字もないわけだから、ましてや真や偽のあろうはずがない。たとえば、二月二日、晴、Aから来信、B来訪、三月三日、雨、C校の給料×円領収、Dへ返信、といった具合

である。行が<sup>ぎょう</sup>いっぱいになってもまだ書くことが残っていると、紙がもったいないので、あとのことを前日の空白に書き入れたりする。要するに、あまり信用ならない。もっとも私は、Bの来訪が二月一日であろうと二月二日であろうと、大してかまわないし、書かなくなつてかまわないと思つてゐる。そして事実、書かないことも珍しくない。私の目的は、だれから手紙が来たか、覚えておかないと返事を出すのに困るという理由、またはいつ返事を出したかを覚えておく必要のためであり、ことに学校の給料は、何年何月分を何割何分もらつたか、こまかな数字はとても覚えていられないので、双方に食いちがいが出たとき調べる必要から記帳しておくのである。そのほか自分としては、いま債権がどれだけあつて、将来、万が一にも全額が支払つてもらえたら、そのとき自分がどの程度の金持ちになれるかがわかる便宜もある。そのほかには何の野心もない。わが郷土の李慈銘<sup>りじめい</sup>先生は日記<sup>(2)</sup>を著述とした人である。上は朝章から、中は学問に至り、下は人の悪口に及ぶ一切合財を記録した。そのため果せるかな、今では手跡そのままを石版印刷で出版されているが、一部が大枚五十円、このご時世では学生はおろか先生だって容易に手が出せない。その日記の記載によると、日記が一箱分まとまるとに、それを待ちかねて次から次へ人手に渡つて筆写されたそうである。はるか遠い「死後」を待つまでもなかったわけだ。この手のものは日記の正統派とはいえないが、もしも言論活動に使命感を抱き、自分のくだす価値判断を人に知られたいが、しかし一面では知られたくない場合、このやり方をまねるのも悪くはない。もっとも、いくらか口語の文が書けるという程度で、この文はやがて百年後に公表される書物に収録さ

れるであろうなど大見得を切るのは鼻もぢならぬけれども。

ところで今回の日記は、そのような「待望久しい」ものでもなければ、前に述べたような簡単なものでもない。現物はまだなく、これから着手するわけだ。四、五日前に劉半農<sup>リウバンシヨウ</sup>に会ったとき、『世界日報』の副刊を担当することになったから、きみも寄稿してくれと言われた。いいとも、寄稿するよ、と答えたものの、さて原稿は？ となつて、ほとほと参つた。副刊の読者は大部分が学生で、みな経験者である。みな「学びて時にこれを習う、またよろこばしからずやの論」とか「人心、古ならずの議」とかをやったことのある連中だ。文章を書くといふことの味がわかつているにちがいない。ところが私は、人からは「文学者」よばわりされるくせに、実際はそうではないのだ。そんな世間の評判は当てにはならない。その証拠に、私は文章を書くのが大の苦が手なのである。

とはいつても、承諾した手前、何とかしなくてはならない。つらつら考えてみるに、たまに感想がわくことがあつても、ふだんは怠けて放つたらかしているために、忘れてしまうのだと気がついた。もしも、すぐさま書いておけば、雑感式のものならできるはずだ。そこで決心した——思いついたことは、すぐさま書き、すぐさま送つて、自分の出勤簿にしよう、と。最初から第三者に見せる目的だから、とても真面目などあらわれるわけではないし、少くとも自分に不利なことはこの際隠しておくことになるだろう。その点、読者はあらかじめご承知ねがいたい。

書くことがなくなるか、別の事情で書けなくなつたときは、すぐさまやめる。それゆえ、この

日記がいつまでつづくか、今からは何ともいえない。

一九二六年六月二十五日、

東壁の下に記す。

六月二十五日

晴。

発病——と、この日の項に書き込むのは、いくらか目障りの感がしないではない。というのは、発病は十日前のことで、今はもうほとんどよくなっているから。もっとも、余波が完全になくなったわけではない。そのためこれを開巻第一句に置くほかないわけだ。愚見によれば、才子は文章発表に際して三大苦をわめき散らす建て前になっている——一に貧、二に病、三に社会からの圧迫である。その結果、愛人に捨てられることになる。専門用語ではこれを失恋とよぶ。私の開巻第一句はこの三大苦の二番目にいささか似ているが、実際はそうではない。実を申すと、端午の節季の前にわずかばかり原稿料がもらえたので、食い気を存分に發揮したあげく、消化不良で胃が痛み出したのである。どうやら私の胃は凶運に生まれついているらしく、とかく仕合わせには縁が遠い。よっぽど医者にかかろうかと思った。漢方医は玄妙きわまりなく、とくに内科は無類だという人もいるけれども、私は信用できない。さりとて西洋医は、名の通っている人だと、診察料が高い上に、多忙で診察がぞんざいである。無名人なら、むろん診察料はいくらか廉い

が、どうも診てもらおう気になれない。というわけで、結局、拙胃がしくしく痛むまま放っておくはかなかった。

西洋医が梁啓超<sup>リフチンチヤオ</sup>の腎臓を片方切り取ったとき世間は非難囂々<sup>ごうごう</sup>、腎臓のことなどろくに研究したこともない文学者までが「加勢」を買って出た。それとともに、「漢方優位論」がこの機とばかり頭をもたげた。やれ腎臓病なら黄耆<sup>ワウキ</sup>があるではないか、やれ何病なら鹿茸<sup>ルクジュウ</sup>があるではないか、といった調子だ。もっとも、西洋式の病院からもしょっちゅう屍体が運び出されるのは事実だ。

私は前にG先生に忠告したことがある——もし病院をやるなら、見込みのない病人は絶対に收容しないことだね。治って退院した患者のことは知らぬ顔をするくせに、死んで運び出されると大騒ぎ、ましてそれが「有名人」だとなおさらだからね、と。私のねらいは、なんとか新しい医学を弘めた<sup>ひろ</sup>かったからだ、G先生は私のことを人でなしと思っただけだった。そう思われても仕方ないといえれば仕方がないが——やんぬるかなだ。

だが私の見るところ、この方法を実行している病院はたくさんある。ただ、そのねらいが、新しい医学を普及させるためではないだけだ。しかも、中国人の新式の西洋医なるものが、およそでたらめで、まっ先にやるのは漢方医の手口のまね、水を割った苦味チンキが二日分で八十銭、うがい用の硼酸水が一瓶一円といった具合である。では診断学のほうは？ 私のような門外漢にはわかりようがない。要するに、西洋の医学は中国で芽生える前にもう腐敗しかかっているのだ。私は西洋医しか信用しないほうだが、ちかごろ、とみにおじけづいている。

数日前、季葦<sup>アキヒ</sup>に会ったときこの話が出て、私は、博士様に診察を受けて金をふんだくられるより、だれか知った人に処方を書いてもらうほうがよいと言った。すると翌日、かれは研究継続中のドクターHを連れてきてくれた。その処方<sup>シヤク</sup>は、むしろ稀塩酸を含み、ほかに二種類あるが、ここには省く。何よりもありがたかったのは、飲みにくいように、甘味料にシロップを添加してもらったことだ。ところで次の問題は、調剤のためにどの薬局へ行くかである。というのは、この薬局なるものがまた、およそでたらめで、手持ちのない薬は別のものに取りかえるか、または配合しない懸念があるからだ。結局、ミスHにたのんで、わざわざ遠方の比較的大きな薬局まで行ってもらった。

こうすると、車賃をふくめても病院の薬代よりは三割方やすくなる。

外から新手の援軍が加わったので胃酸は勢いを盛り返し、一瓶の薬を飲みおわらぬうちに痛みはとまった。私はさらに数日飲みつづけることにした。ところが二本目は、おかしなことに、おなじ薬局、おなじ処方でありながら、味がちがっていた。一本目のように甘くはなく、また酸っぱくもなかった。私は自分のからだを調べてみたが、べつに悪くはならない。さいわい急性の病気ではないので、大したことはあるまいと思って、そのまま飲みつづけた。三本目を買いに行ったとき、ついでのことに根掘り葉掘り問いただしてみたら、その答えは、いくら糖分が少かったかもしれない、ということだ。ということは、肝心の薬のほうはまちがっていない、という意味である。

中国というところは不思議がじつに多い。糖分が少いと甘味がへるだけでなく、酸味までへるとは、まさに「特別の国情<sup>(6)</sup>」である。

いま、大きな病院では患者のあつかいが冷い、という非難の声があるが、たしかに、病院が患者を研究材料あつかいすることはありうるし、病院にいる「高等華人」が患者を下等な研究材料あつかいすることも、ありうることだと私は思う。それがいやなら個人病院へ行くほかないが、その代り診察料や薬代はべらぼうである。知人に処方頼んで自分で薬を買う場合は？ 前後とで薬が変らぬという保証はない。

これは人の問題だ。投げやりにされるとすべてが疑わしくなる。呂端<sup>りょたん</sup>は、大事をおろそかにしない、といわれた。それはつまり、小事なら多少おろそかでもかまわぬ、という意味だ。このことはむろん、われわれ中国人の雅量のほどを示すに足るものではあるが、そのために私の胃痛は長引くことになる。宇宙の森羅万象中において私の胃痛など、むろん小事であり、いや小事以下でさえあるから。

質問したあとで受けとった三本目の水薬は、最初の瓶とおなじ味がした。そこで謎が一挙に解けた。すなわち、二本目は薬一日分を水二日分に割ったために、味が半分にうすめられたのだ。薬でこんなへまをやった割には、意外とはやく恢復した。病気がよくなると、Hは今度は私の髪が伸びている、なぜ散髪に行かないのか、と文句をつけてきた。

こんな文句は耳にタコができている。例によって「相手にせず」だ。といっても、仕事にかか